

# 樺太

## 引揚げの記

北海道 高山文治

### 旧樺太のこと

その地に生まれ、その地に育った私にもみんなと同じようにたくさんの思い出がある。幼いころに味わった四季折々の自然との触れ合い、また、忌まわしい戦争のことなどの記憶がよみがえるが、戦後五十年を迎えようとする今も、その数多くの思い出が私に大きな影をもたらし続けている。

昭和二十二年の夏、私を長男とする一家六人は、沿海州に面した国境（北緯五〇度）から三十数キロ南下

した西樺丹村という炭鉱の町から、日本本土への引揚げの中継地である真岡港に向かう旧ソ連の貨物船の船倉にいた。私は大泊という港町（北海道稚内からの連絡航路の受入れ地）に生まれ、父は王子製紙工場で働いていたが、昭和十四年の小学校一年生のとき、当時の三井資本によって開発された「西樺丹石炭鉱業所」に働くことになり、移り住んだのである。

当時の西樺丹村は人口が五千人程度の漁業と木材の一寒村だったが、平均が七千五百カロリーという良質の炭層を有し、当時は国内で唯一のエネルギーが石炭が主体という立場から、各資本が競って石炭産業に取り組んでいるという現実から、石炭の開発に拍車がかかり、炭鉱で働く人たちの待遇もよかった。西樺丹村に移り住んだころも炭鉱が開鉱したばかりの時期で、

生活する住宅もようやく出来上ったばかりで、電灯設備も整っておらず、住宅の周囲には整地した名残りの木株が山積みになれ、その間をリスが群がり、夜になると狐や熊が餌あさりにくる鳴き声をして、朝になると住宅の側まで動物の足跡が散見された。

私が生まれて一年生になった夏まで過ごした大泊（現コルサコフ）は、人、物質、文化ともに交流が盛んで一般でいう「文化の開けた町」だったが、西櫛丹村はその面では欠けていた。

代わりに子どもがもつとも好きな自然は十分すぎるほどだった。炭鉱地帯から二キロほど離れた海辺には季節ごとの魚介類が豊富だったし、溯上してくる鮭・鱒をはじめ川魚も群れていた。野山には幾種類もの山菜が手掴みで採ることができた。子どもたちは恵まれた自然を友にして育った。戦争がなかったら、私たちは恵まれた環境のなかで、今の年代を過ごしていたことだろう。

第二次世界大戦末期の昭和十九年九月（すでに霜が降りていた）に、父をはじめ炭鉱で働いていた多くの

人たちは、九州の同資本系列の炭鉱に徴用になった。

理由は戦局が日本国に不利な状態に追い込まれ、石炭の輸送力がきびしくなったことによるが、当時、小学生だった私にはわかる由もない。……そして昭和二十年八月十五日終戦。日本の列島は北海道と樺太とは海峡を境にして分断され、アメリカとソビエト連邦共和国に区別されてしまった。徴用された父とも音信不通になり収入もすべて途絶えたなかで、家族六人が生活しなければならなかった。そのような境遇のなかで、私は小学校高等科一年生で学業を捨てて炭鉱の鍛冶工場に就職したが、一少年が得る収入はたかがしれている。毎日の食事も馬鈴薯が常食で、おかげさなれば虫の入った澱粉かすを食うような生活を余儀なくされた。昭和二十二年夏、西櫛丹村で始めての引揚者のリストに入った私たち一家は、限られた時間のなかで慌ただしくソ連の貨物船に乗った。六人の家族が、父が生きていであろう日本の本土に向かって、不安におびえながらの出発だった。

ソ連船は船底に西櫛丹で産出した石炭を敷きつめた

上に、シートでかぶったところが真岡（ホルムスク）に到着するまでの飯のねぐらだったが、大小便は甲板の船べりに直接に海に落ちる仕組みの便所二カ所だけという。人を収容するにはなんともお粗末な設備だったが、私たちは心細い気持ちを抱きながら、知った者同志でかたまった。ぐるりと周りを見ると一家の働き手を徴用された家族がほとんどだった。もちろん食事など用意されていない。みんなはこの日に備えて貯えてきた食物（というより過酷な食生活のなかでようやく残した物）の煎大豆や干し飯をだして食べながら、不安な気持ちを紛らわしていたが、そのうちに喉の渴きがひどくなった。

今までは豊富でしかも良質の水に恵まれて生活していた私たちは、飲み水のことについては格別に意識してなかった。さらに乗船するまでの短く限られた時間（呼びだされて五時間後に船着場に集合すること。遅れた者は乗船できない旨を言い渡された）の慌ただしさのなかで、ついで飲料水のことには気に留めてなかったのだった。そのくせ、一升瓶（金属の物はほとんど

供出させられた）だけは後生大事に持ってきたのだった。全くあほうみたいな話だが事実である。グループのなかで水を用意してなかったのは私たちだけだった。いまさら水をくれと言いだせる雰囲気でもない。そんななかで五歳の妹が「兄ちゃん。水が欲しい」と言い出した。いま思うと幼いなりに緊張していたところに、乾燥食物を腹にいれたので渴きがたのである……。ともあれ私が動かざるを得ない羽目になり、瓶を手に船倉を出ると船員室の扉を叩いた。

「チトー？（なに）」

中年の男が顔をだす。

「ワータ、ダワイ（水をください）」

うる覚えのロシア語で単語を並べると、船員はしばらく私をみていたがうなずくと手をだした。瓶を差し出すと押しつけてなにかしゃべりながら指を丸めてみせる。「カネをくれ」と解釈したが、いままで水に代価を払った覚えはない。それでも紙幣（わずかな金額だが）をだすと、むしろとるように自分のポケットに入れ、瓶を手にすると側の便所の手洗い水のコックを

ひねって満たし、私に押しつけて扉を開めた。瓶を透かしてみると糸クズのようなものが浮遊していて濁っており、とても飲めそうにもない。持つて戻ることをあきらめて手洗い場に瓶を逆さにした。水を捨てながら自分が無性に惨めになって思わず涙が出たのだった。

突然の声にとび上がる気持ちだった。振り向くと若いソ連の女性が入口で私の手元をみつめている。残念ながら外人に対して、状況を説明できるような語学力はない。しかし、汗をかきながらの手真似と単語の羅列に、彼女は私の立場を理解したようだった。『ちょっとおいで』という素振りです先にたつ。行った所は厨房だった。彼女は鍵をだして扉をあけると瓶をすすいだあと、いっぱい水を満たしてくれた。

「スパシーボ・モノーガスパシーボ（ありがとう・本当にありがとう）」

そう言いながらポケットに手を入れると、幾枚かの紙幣が手に触れたので差しだした。

「二エツト（いらぬ）」

彼女は札を押し返そうとしたが、私の顔を見て、

「スパシーボ」

と言いながら、戸棚からパンを取り出してよこした。弟や妹のことを頭に浮かべながら受け取ると、彼女はちよつと思案して別の戸棚から缶詰をだしてパンと一緒に手早く新聞に包み、

「イジエスダー（おいで）」

と先に立って歩き、そして船倉の入口までくると、

「ダスヴィダーニヤ（さようなら）」

と包みを押しつけて去った。

水はうまかった。酸っぱい黒パンにアメリカ製のカシセル（缶詰）の肉の味はよく口に合った。私の一家は、こういう食物すら口にすることの少ない生活を送っていたのだった。

貨物船は途中二カ所に停泊し数十の家族を収容しながら航海を続けた。船倉は私たちが乗船したときから、石炭特有の油臭い匂いがしていたが、人が増えるにつれてほかのにおいと混ってむかつく臭気を漂わせていた。が、なんとか耐えて真岡港に着いた。

「ダスヴィダーニヤ（さようなら）」

手を振る船員のなかに、彼女たち数人の女性船員もいた。水をくれた女性は私をみると、

「ダモイ・ハラショー・ダスヴィダーニヤ（帰国よろしい、さようなら）」

と言いながら紙包みを押しつけて、肩を数回かくく叩いた。……あとで包みをひろげてみると日本軍の乾パンが一袋でてきた。中に入っていた金米糖がとても甘かった。

真岡の引揚者用の収容施設は港を見おろす高台にあり、二カ所に区分されていた。建物全体の印象から、以前は学校らしかったが、その辺りの記憶は定かでない。

収容所に入ると各地からの集団は家族単位に解体され、新たに再編成されて各班から運営委員が選出され、その人びとを中心に日常計画が組まれた。それは集団の自主管理が目的らしく、集まったなかの町村比率のなかで知名な人が委員になっていたようだったが、当時十四歳の私にはその辺りのことも記憶にない。ただ、部屋を掃除したり、その他の雑用を当番制でしたこと

を、かすかに記憶している。各室内に四十ほど二段ベッドが設けられてあり、一応の日常生活に不便はないようだった。

引揚者（つまり私たち）を乗せた船は、日本国籍の船腹に白十字の大きな目印と日の丸が鮮やかに付いている。船が帰国者を乗せて出港する度に、第二収容所に移動することになっていた。が、天候やなにかの都合で引揚船が入港しないときは、その分だけ移動が遅れて収容所生活も延びることになる。

子供は環境になじみやすい。不安さをあらわに見せる大人たちをよそ目に、それぞれが自分の親しいグループをつくって終日遊び暮らした。収容所の周囲に有刺鉄線が張り巡らされ、着剣したソルダート（兵隊）が二十四時間体制で監視しているが、そのなかを抜け出して町に行った者もいたようだが、その者は真岡の地理に詳しい者で、ソルダートも子どもと思つてか、あまりとがめなかつたらしい。

収容所内では流言とかっぱらい（盗み）が横行した。デマの方は、体の丈夫な男は本国（ソ連本土）に引つ

張られて重労働させられる、若くてきれいな女は女郎屋にやられる、というたぐいのものだったが、こうした流言が真実味を帯びて広まると、たちまち面白い現象が起きた。

日ごろでかいことを言っていた男が、病人を装って必要以上に咳をしながら背を丸めて歩いたり、おおげさに足をひきずって歩き、自分が身体障害者であることを誇示したりする者がいた。

そばのベッドに娘三人がいる家族がいた。いつの間にか女たちの顔はうす汚れていて、衣服も粗末な者に替わっていた。この一家は引き揚げるまで裕福な生活をしていたらしい。身につけている物は高価で派手な感じがした。態度も見識が高かった。母が隣り合わせのよしみで「お世話になります」とあいさつしても母親はあいまいな表情をみせたきりだった。父親はずんぐりした猪首型の人間で二人とも指輪を幾つもはめていた。彼の家族を知っている者がほかの班にいたが、豊原（現ユジノサクリンスク）に住んでいたとかで、ソ連の軍将校を相手に相当な仕事をしていたらしく、

今度の引揚げだってソ連軍のお偉いさんにうまく手配してもらったという話だ」と言っていることを聞いた。流言について私たちは、戸惑う必要はなかった。女気といえ、生活に疲れた中年の女と頭髮にシラムをわかせている幼い妹が一人。家族全部がうす汚れた一家だったからであつた。

数日ごとに若いソルダート（ソ連兵）が肩章をはずした丸腰の旧日本兵を連れてやってきた。彼らは收容者を外にだすと、白い麦粉のようなもの（あとで消毒用のDDT粉剤であることを知った）をまき散らした。部屋に戻るとあちこちから「ものがない」という声が飛び交った。それは万年筆であり、ライターやタバコのケースだった。私はそれらの品物を盗んだ犯人を知っていた。防疫班の仕事が珍しく窓からのぞいていると、指図しながらついて歩いてきたソ連兵が、ときどきベッドに手を差し込み、素早くポケットに移動しているのを見たのだった。若いソ連兵が口笛を吹きながらの行動を知りながら、私は沈黙していた。日本に引き揚げるのが最大の目的である今、自分に関係のな

イトラブルに巻き込まれる事を避けたい気持ちと、被害を被った家族の多くが、同じ引揚者でも戦前に裕福な階層にあつた者で、収容所内でも肌の合わない人が多かつたからである。

しかし、それは一度で終わらなかつた。幾度が繰り返され、さらにほかの班からも被害を受けた声が増えてくると、委員たちが講義したがソ連兵は委員の手真似の交渉にも、

「ニエツト(ない) ニズナイ(知らない)」を繰り返すだけでのれんに腕押しの有様で、さらに講義すると、「ダモイ・ニナーダ?(掃国しなくてもいいのか?)」と、逆に恫喝どくわされる始末で、結局は「貴重品は肌から離さないようにしよう」という申し合わせで対応せざるを得なかつた。

食事は三食とも支給されたが、中身は粟を油こく煮たものに水分を加え粥状にしたもの(カーシャと言つた)に、塩辛い鱈の切身か、酸っぱい黒パンに魚の煮汁などが支給された。同室の裕福な連中は「そんなまずいものを食えるか」という態度で、カンセル(肉

の缶詰)や白パンを食べていたが、日数がたつにつれて持ってきた物が底をついたのか、皆と同じものを食べているようだった。

便所は広場の片隅に設けられてあつたが、二メートルほどの深さで細長く掘つて板を渡し、周囲にむしろを下げてだけという、極めて現実的素朴な設備で、内部に入ると一列に並んでしゃがんでいるかっこうが丸見えである。男ならともかく女性が入る気持ちが失せてしまう便所だった。それでも委員に苦情を申しこんだのか、間もなく内部をむしろで仕切つて片側に(女子用)の札が掛けられて何んとか解決したようである。第一収容所にいるとき三回ほど「シャワー室」に行つた。それは防疫班についてきたソ連兵が引揚者の持ち物をかすめ取るという問題を起こした後だった。十数人ずつ裸になり、衣類は各自に渡されたひもつきの番号札を付けて蒸気消毒室に入れられ、シャワーを浴びた者は出口で自分の衣類を受け取る仕組みになつていた。

シャワー室はうす暗い掘立小屋に穴のあいたパイプ

が頭上に張り巡らされ、足もとは土間に板を並べただけというなんともお粗末な設備に、湯はぬるま湯でシヤワーを浴びているのは数分が限度であり、夏とはいっても日本とは比較にならない温度差のなかで、足もとの冷気が肌を包みこむ。ガタガタ震えながらシヤワー室を出ると湿った衣服が待っていたが、たちまち「財布が、万年筆がない」という声がそここで出た。……が、この声に應對するソ連兵は、「ニエツト」「ニズナイ」だった。全く收容所内の再現である。彼らは罪を犯しているという意識が感じられず、あくまで陽気だった。

冷静に考えれば、私たちは戦争のために物不足な生活強いられてきた。とくに終戦の混乱のときは、戦火を避けて逃げ回った経験をほとんどの人が味わっている。物資の不足と緊張の毎日が貴重品を肌から離さない習慣をつくってしまい、今回のような被害に結びついたのでないだろうか。

第一收容所にいた数十日の間に「物売り」がやってきた。彼たちは私の年齢以下の少年少女たちで数人の

グループで行動していた。扱う品はタバコ、缶詰、旧日本軍の乾パンなど食品が多かったが、監視兵の目を窺っては鉄条網の向こうから品物を見せて声をかけてくるのだった。

ブルジョア（近くにいる娘連れの子を、同室の者は陰でそう呼んでいた）はある日、「どうせ没収されるんだから……」と、分厚い札束を見せびらかしながら出て行ったが、やがてぶりぶりしながら戻ってきた。彼の言によると「釣銭をくれなかった」のだという。結果的には数倍の金銭を払って高い買い物をしたことになるが、このような事態になることは予想されていたことだ。とくに私の場合、真岡に来る途中貨物船の中で到底飲めないであろうトイレの手洗い水をわずかにしろ、私にとつて貴重な金銭と引換えに押しつけられた記憶が生々しく残っており、收容所に入ってから数日の間にDDT消毒のときやシヤワー室のことなど、戦勝国の優越さをかさにきたソ連人のなかば公然とした物盗り行為に、なんとかしつべ返しをしたいという気持ちを抱いていたので、所内で友達になったグルー



プの話題にしてみた。ただしブルジョアが被害者であることには触れなかったが反応は大きく、「仇をとつてやるべや」ということで、早速その日の日暮れに実行することにした。方法は札の上に金額の大きな紙幣を乗せて相手をおびき寄せ安い札を中に挟みこんで渡す、という幼稚なやりかただが、彼たちが札を手にすると数えもせずにポケットに押しこむのを幾度も見ているので、この案は成功した。向こうも監視の目を盗んでの仕事であり、結果的には半値以下の代価を渡してその分だけ儲けになる。この方法はグループのなかでも年長者の一人が言いだったが、稚拙な作戦が意外な盲点となったのだった。発案者は成功謝礼として幾ばくかの金銭を要求したが、私はそのことを承知した。売り買いは互いに条件のよい日暮れ時だったので、しばらくはばれなかったが、やがて相手はこちらを區別するようになった。我々が手招きしても人差指を口の辺りで左右に振り、「チツチツチツ」と言つて相手にしない。

ちようどそのころ、「ブルジョア」氏が声をかけて

きた。お互いに顔を見知つて十数日になるが、初めてのことである。今までは軽べつした態度をみせこそすれ、口を利いたことがなかった。それがニヤニヤ笑いながら、「おい、あんちゃんよ」と寄つてきたのである。「あんちゃん。うまいことやつてゐるつてな」「俺、なんにも……」、突差のことで声をかけてきた理由がわからず口ごもる私に、「隠すな隠すな。聞いたぞ、ソ連兵の餓鬼から、ただ同然で取つてゐるつて話じゃないか」「……」「いや、な、俺もあの餓鬼どもにだまされてゐるんで腹に据えかねていたんだ。それでな……」母が不安な表情でゐるのを横目に、かなりの札束をだして私に押しつけた。

「これな、お前にやる。第二さ行つたらどうせ没収されるんだ。あいづらから巻き上げるときの足しにしてくれや。もう鼻紙にもなりやしない。お前さんにやるから好きなように使えや……」

そう言うと、

「かあさん邪魔したな」

と離れて行つた。

「なにかあったのかい？」

母は額に皺を寄せて言う。

「いや、なんも」

「なんにもつて変なことしないでよ、船に乗れなくなったらどうするのさ」

なおもくどくど言う母にこたえずに毛布を被って横になったが、その晩は寝つきの悪い夜だった。

次の朝グループが集まったとき、昨夜の話をしてみた。渡された金額も半分以下にした。仲間はすでに物売りから敬遠されている連中ばかりで、これという思案も浮かばない。町に出掛けてバザール（市場）で買うというごく月並みな話でうやむやになってしまった。

考えた末に私は一人で収容所を抜けだして町に行ってみることにした。物売りを相手にしたとき、監視の死角で交渉した盲点も知っていたので、戻ったときにその場所を利用することにして、収容所を出るときは交代時間を狙って正門から出ることにした。というのは照明の関係で詰所から施設全体は明るく見えるが、逆に門から数歩離れると見えないのである。さらに見

張りのソ連兵はどちらも二十歳そこそこで極めて陽気なタイプで、話に夢中になると自分の任務を忘れてしまふ気質の人間だった。

日暮れの交代時にすきをみて外に出た私は、道路と並行している塹壕にとびこんだ。戦争末期につくられたという壕は、建物の周囲に掘られてあり、深さは一メートルほどで体を隠すのに好都合の深さだった。長話の終わった交代兵は壕に向かって気持ち良さそうに放尿したあと、口笛を吹きながら歩きだす。私は見失わない程度の距離を保ちながら彼について行く。道は小高い岡から折れ曲って町に通じているらしい。真岡は港を中心に海岸に沿って発展した町らしく、戦後の消費経済もそこに集中していた。並んでいる倉庫の壁に寄りかかるように張られた天幕の下で雑多な品が並べられており、そのほとんどが食品だった。私があとをつけてきたソ連兵もその雑踏のなかにいた。彼と目が合ったとき思わず心臓が高鳴ったが、彼は私を意識してないようだった。裸の黒パンを抱えた、かわいい女性と手を組んでいた。その表情はあくまで陽気で屈

託がなかった。

私はまず札束をよこしたブルジョア氏に敬意を表して、彼の好みそうな品を探した。いくら没収されるからとはいえ、多額な金銭をもらったという気持ちの負担があり、その心を軽くしたかった。ウオッカの小瓶を二本。アルコール度が七〇パーセントというやつである。

このウオッカには深い思い出がある。父が徴用で終戦を迎えて音信不通になったあと、明日の糧を得るために、小学校の学業を途中で放棄しては働いたとき炭鉱の鍛冶職に就いたが、あるときソ連兵がジープのスプリングが折れ損じたので修理してくれと、車ごとやってきたことがあった。その日は終業に近い時間であり、炉前（ほどもえ）に言わせると、スプリングを製造するのに五時間はかかるという。私たちは食事にかこつけて断わったが、彼は、「食べる物はたくさんあるから是非やってくれ」と言う。結局鍛冶工三人、仕上げ・旋盤が各一人の計五人でスプリングの新調に取り組んだ。彼は仕事の合間に惜し気もなく白パンや、

肉の缶詰を並べて、我々の機嫌をとり完成したとき、

「カンチャイ（完成だ）」

とさらに食べ物を並べたが、その中にウオッカがあった。生のまま飲んだ者はそのアルコール度の強さに悲鳴をあげた記憶がよみがえった。

次にタバコを買う。一般人が吸っているマホロカと異なつて、吸口が半分もある高級品であり、二百本がばらで箱に入っていた。チョコレートも買った。物売りが売っているのと段違いに良い品物だった。時計がないので時間もわからなかったが、人の流れが少なくなったころ、街灯のない坂道を収容所に向かった。荷物は重かったが、私は自分の行動によつて、物売りから求めていた品物が、いま買った物の二倍から三倍もしていたことを知ったのだった。

収容所に入るとき藪藪伝いに行つて、有刺鉄線の下をぐぐつた。不思議に恐怖感はなかった。室内は暗く静かだった。私は前もつて区分していた物を、ブルジョアを揺り起こして押し付けると自分のベッドに戻つて毛布にもぐりこんだ。母は私のことを心配して眠ら

ないでいたのだろう。小声でしかつたが返事をしないので諦めたのか、毛布をまくり上げる気配がした。

次の朝、ブルジョアに、「あんちゃん大したもんだ」と敬意を表され、娘たちからも頭を下げられた。彼らからどんな理由にしろ頭を下げられるのは初めてのことである。やはりウオッカとチヨコレートの効き目があったようだ。母は「心配させて」と愚痴っていたが、素知らぬ顔をしていた。弟妹たちがチヨコレートを嬉し気に口にかけている様子を眺めて、豊かな気持ちになっていた。

ある日突然に第二收容所に移動するということを運営委員から言われた。彼ら（ソ連人）が日本人に対する通告は突然のことが多かったが、今回の移動は帰国が近いことを意味していた。

私はその夜、人が寝静まるのを待って、鉄条網を抜けだし塹壕に入った。以前に物売りたちが壕の中から品物を持ちだすのを幾度か見ているので、あるいはと思ったのである。暗闇のなかを棒きれで探りながら進むと、はずれの方に数個の包みがあった。手を入れて

確かめると物売りたちの品である。なんとか持って室内に戻ったが、費やした時間がわずかにもかかわらず、胸の鼓動が高く鳴り、汗びっしりだった。ベッドに入っても高鳴りは治まらない。罪悪感が自分の気持ちをつたかぶらせた。「あいつらだって、高いものを売ったかぶらせないか」そう思うことでその気持ちを無理に押さえたのだった。

次の日、昼食を終えたあと第二收容所に移動した。検査は予想外に厳しかった。彼らは旧日本兵が検査する手もとをじっとみつめている。ソ連の紙幣は全部没収。ソ連人が写っている写真もしつこいくらい問いただしたあと没収された。

検査が終わって第二施設に移るとき、海が見え、日の丸と白十字のマークも色鮮やかに映えた船が二隻停泊しているのが眺められた。

「船だ」

「日本の船だ」

口ぐちに言う言葉は、それぞれの感情がこめられていた。

第二収容所に落ち着いて間もなく、

「あさって乗船だよ」

と言った者がいたが、その言葉に真実味はなかった。

……しかしへ日本の船に乗るのだ」という現実が、どうしようもない高ぶりとなって胸を襲うのだった。

防疫?のための痛い注射を背中に打たれ、それぞれの家族の氏名が確認されたあと、乗船者名が告げられて三日後に乗船することになった。引揚船は「間宮丸」と「泰北丸」の二隻の船だったが、私たちの家族は泰北丸だった。

いよいよ乗船の日、空は晴れて海も穏やかだった。収容所に入っていたすべての日本人家族は、長い坂を下り、列を作って歩き港に向かった。

船内は引揚者に乗せるために、ソ連の貨物船とは比較できないほど設備が整っていた。船倉に二段ベッドが並び、湯茶は各自が自由に飲めるようになっており、便所も清潔だった。なによりもほっとしたのは、船員と日本語で会話できることだった。船員の多くは関西なまりだった。

「あんさん大変やったろ。もう安心でっせ」柔らかな口調は、耳にする者に安心感を与えた。

出発近くなつて、中年の女性が数人の船員に囲まれて乗船した。彼女は視線が定まらず目がうつろで、明らかに精神に異常をきたしていた。

「かわいそうに……」

だれかが言った。

あとでわかったが、樺太東海岸の知取付近の女性で戦火から避難の途中に幼子と逃げることができず、やむなく木にくくりつけて逃れたが、あとで戻ったところ幼子が生きたために口の中にいれたのだろう。手の届く限りの草がきれいにむしられていて、腹だけがぽこんと膨らんで死んでいたという。彼女はそれ以来神経が異常になり、豊原市の精神病院に収容されていたが今回の帰国になったのだという。

泰北丸の汽笛が辺りを揺るがせて鳴ると、間宮丸もこたえて汽笛を響かせた。エンジンの響きが体にくすぐったい感触を与える。二隻の船は舳先をゆつくりと日本の本土に向けた。

## 【執筆者の横顔】

高山氏との交流の出合いは、昭和六十二年七月、前市長細谷徹之助氏と私が「芦別ペンクラブ」をつくるうということになり、そのとき彼が、炭鉱文芸誌に随筆などを掲載するなど文筆活動をしていたことから会員にお誘いしたときに始まる。「芦別ペンクラブ」は、日本ペンクラブ」のような立派な血筋をもった団体とは全く別質なもので、市内において詩歌・俳句あるいは随筆などそれなりの文筆活動を行っている者の集いで、モノを書くこともさることながら、集まっては郷土芦別の文化を語る、いわばよいサロンの役目を果たすのが目的であった。

高山氏は、樺太で生まれ育ったが少年時代の昭和十九年お父さんが戦時増産の目的のもとに、樺太の炭鉱から九州炭鉱へ徴用となり、戦後その父とも音信が絶え、母の手一つと兄弟の長男として苦労と辛酸の上、引き揚げてきた。「引揚げの記」は高山少年の子どものころに焼きついた数々の思いを懐古したものである。高山氏が樺太より引揚げ函館上陸して、父が北海道芦

別町の三井芦別鉱業所に在籍していることが分かり、父と会うべく母、兄弟を伴い芦別に来た。しかし、父は坑内落磐事故により負傷療養中であつたため、直ちに家族の生活の糧を得なければならず、少年高山氏はすぐこの鉱業所で働くことになったわけである。

やがて苦労人であつた高山氏は戦場同僚からも敬愛されるようになり、昭和五十四年四月組織候補として芦別市議会議員に当選、以後三期十二年の病氣勇退まで本市政振興に努力してきた。私も地方公務員として昭和五十一年定年退職したが、O・Bとして市の公的団体で活動していたから、折に触れ高山氏と接する機会があつたが、労働団体出身者というイメージは全くなく、苦労人としての人柄がকাশし出す非常にソフトな物腰の方で市民にひろく好感をもつて迎えられており、私どもペンクラブの中でも素晴らしい存在となつている。

(社引揚者団体北海道連合会

副会長 佐藤 晴夫)